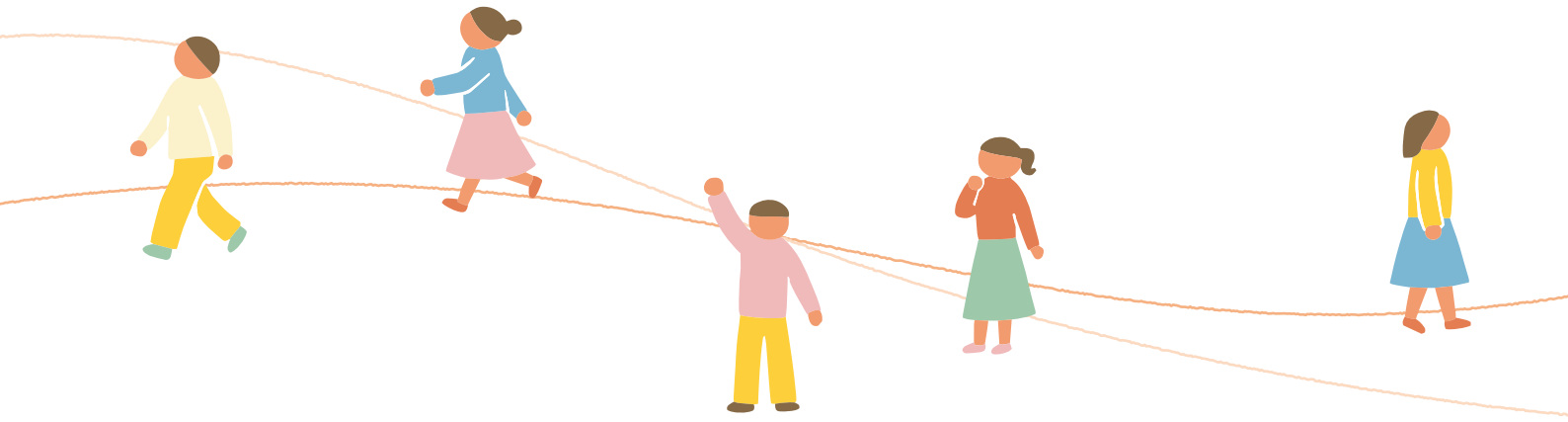
障害と身体をめぐる旅2024

令和６年度 神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター 報告書

（ 運営 ： 認定NPO法人 ＳＴスポット横浜 ）

令和
6年度

神奈川県
障がい者
芸術文化活動
支援センター



ごあいさつ

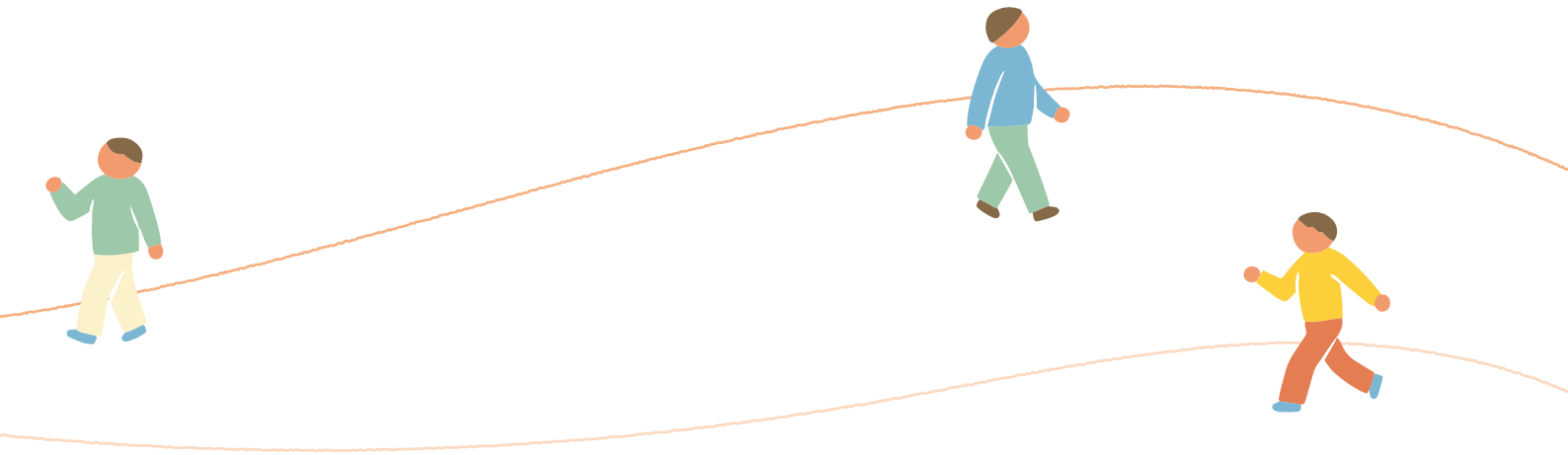
神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターは、2020年４月から活動を開始しました。

運営団体であるＳＴスポット横浜は、神奈川県横浜市にあるＮＰＯです。
「アートの持つ力を現代社会に活かすこと」をミッションに、小劇場「ＳＴスポット」を運営する芸術機関として1987年に活動を開始しました。2004年からは地域コミュニティに向けた活動を担う地域連携事業部を設置し、学校での芸術家による授業の実施や、地域の文化団体支援などを行っています。

福祉分野における活動は、2015年から開始しました。文化庁による助成や神奈川県との協働事業を通し、地域に暮らす障がい者が芸術文化活動を通して生活の質を向上させ、社会の中で顕在化することで、障がいの有無にかかわらず共生する社会の実現に向けた基盤整備の一翼を担うことを目指した活動を続けています。

支援センターは今年度５年目を迎えました。これまで訪れていなかった地域や、出会っていなかった分野のみなさんとお会いすることができ、支援センターのことを少しずつ知っていただけていることを感じています。また、県内各地の福祉施設や文化施設や、芸術団体などによる活発な取組に出会うこともありました。今年度は、それぞれの活動がつながることで、さらに活動が豊かになることを目指して、各事業に取り組みました。

本年もさまざまな風景、表現と出会いました。この冊子では、旅の様子の一端をみなさまにお伝えいたします。



神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターについて

神奈川県内の障がいのある人が身近な地域で文化芸術に触れられるように、
障がい福祉・芸術文化のネットワーク構築を目指し、2020年4月に開設しました。
「つなぐ」「つくる」「支える」の3つを柱に、活動を展開しています。

つなぐ

障がいのある人の芸術文化活動に関する相談を受け、
適切な情報につなぎます。また、障がい福祉・芸術文化の
枠を超えたネットワークを構築します

つくる

芸術家によるワークショップ等を実施し、
障がいのある人が芸術文化活動を
体験・発表できる機会をつくります

支える

講座等を開催し、障がいのある人の
芸術文化活動を支援する人を支えます

厚生労働省「障害者芸術文化活動普及支援事業」について

障害のある人が芸術文化を享受し、多様な芸術文化活動を行うことができるように、地域における支援体制を全国に展開し、障害のある人の芸術文化活動の振興を図るとともに、自立と社会参加を促進することをねらいとした事業です。2017（平成29）年度から実施しています。
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougaishahukushi/bunka.html

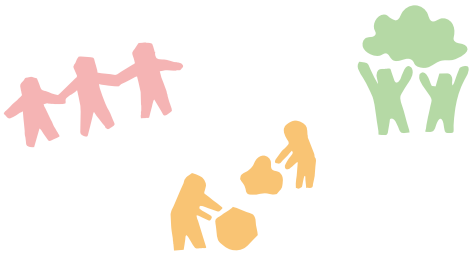
厚生労働省
ウェブサイト

今年度の取組みについて

各事業を取り組むにあたり目指したことと、成果やそこから見えてきた今後の展望は以下のとおりです。

目標：活動が豊かになるために

- Point 1 文化施設、生涯学習・社会教育施設とのネットワークづくり
- Point 2 県内情報の整理
- Point 3 ワークショップ実施後の展開のモデル形成



成果

企業や芸術文化関係者など、障がい福祉の分野外の方からも相談があり、認知の広がりを感じています。相談内容では、福祉施設や芸術団体、自治体などによる自主的な企画に関する相談が多くありました。企画のアドバイスや地域資源の紹介などをとおして、実現に向けて進む事例もありました。

▶ 詳細はP.07～

成果

県内の8施設に出かけ、ワークショップを行いました。施設の要望やニーズに合わせて、アーティストや内容の調整を行いました。また、実施にあたっては所在する自治体の担当課や文化施設に事業の説明や見学の呼びかけを行い、継続的な実施体制づくりに向けて働きかけました。

▶ 詳細はP.11～

成果

障がい福祉と芸術文化の両方の分野の知見を深め、参加者が自分の現場に活かせる理論、体験、ネットワークを渡す講座を3回行いました。実際に芸術文化活動を体験し、参加者同士や講師と対話する時間をとおして、視野を広げることにつながりました。

▶ 詳細はP.28～

今後の展望

資源の発掘と可視化	障がいのある人と芸術活動をつなぐ場に関する情報を集め、ウェブ等での公開など、だれもが活用できるような方法を検討します。
自治体への周知の継続	引き続き、パンフレットの配架依頼等をとおして、県内各地への周知を続けます。
ワークショップ実施後の展開の検討	ワークショップ実施後、福祉施設のなかでどのように芸術文化との接点を持ち続けられるのか、考え続けていきます。

今後もさまざまな分野と協働しながら「つなぐ」「つくる」「支える」取り組みを続けていきます。

目 次

04　神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターについて／今年度の事業を通して

〈 つなぐ 〉

08　相談対応内容

09　情報収集・発信／座談会「文化施設のみなさんと考える障がいのあれこれ」

10　協力委員会（全２回）

〈 つくる 〉

12　第２松風園×上村なおか（ダンサー・振付家）
—「そのままの身体と出会う」

14　ほうあん第二しおん×北川結（ダンサー・振付家・イラストレーター）
—「みんなでつくるダンスの時間」

16　ゆりあす×中村マミコ（OUTBACKアクターズスクール 校長）
—「一人ひとりの物語を見つめる」

18　LEO×ドゥイ（造形ユニット）
—「まざる、つくる、あそびの時間」

20　アグネス園×原良介（画家）
—「みんなの色を重ねる」

22　さらん×Art Lab Ova（アーティストユニット）
—「表現から出会う場」

24　リエール×ドゥイ（造形ユニット）
—「それぞれの表現がつながる」

26　ケアセンター×ドゥイ（造形ユニット）
—「五感をつかって変化をたのしむ」

〈 支える 〉

29　勉強会　第１回　話してみよう「ケアをめぐるあれこれ」

30　勉強会　第２回　体験してみよう「音楽から生まれる、ともにいる場」

31　勉強会　第３回　考えてみよう「障がいのある人とともにいること」

32　報告会　地域とともに考える障がい福祉と芸術文化

34　おわりに

つなぐ

ここでは、障がい福祉、芸術文化の枠を超えたネットワーク構築に取り組んだ活動をご紹介します。パンフレットで相談窓口の周知し、障がいのある人の芸術文化活動に関する相談や問い合わせが多く寄せられました。ウェブサイトでは県内の公募・イベント情報などを発信しました。また、県内の文化施設・団体のみなさんといっしょに障がいのある人と文化施設のかかわり方について、いっしょに考える機会を作りました。支援センターの運営方針については、さまざまな専門家にアドバイスをいただく協力委員会を開き、議論しました。

相談支援

情報収集・発信

文化施設のみなさんとの座談会

協力委員会

相談対応内容

障がい者やそのご家族、障害福祉サービス事業者等から芸術文化活動に関する相談を受け付けました。対応件数は112件でした。（2025年2月28日時点）

相談件数の内訳

❶相談者属性　合計：112件

障がい当事者	34
障がい当事者の家族	5
障害福祉関係者	28
芸術家・文化団体・文化関係者	16
文化施設	2
市民団体	1
教育関係者	0
医療関係者	2
自治体（他支援センターなど）	11
企業	8
その他	5

❸居住地別　合計：112件

横浜	39
川崎	16
相模原	7
横須賀・三浦	8
湘南東部	7
湘南西部	4
県央	10
県西	4
県外	16
不明	1

❷相談方法　合計：112件

面会	22
電話	47
メール	29
オンライン	1
問い合わせフォーム	12
その他	1

❹相談内容　合計：112件

鑑賞の機会	3
創造の機会	33
発表の機会	27
交流・連携	29
調査研究・保存	2
権利保護	5
人材育成	6
情報発信	7

相談内容の詳細

- 鑑賞について……文化施設で開催する演劇公演で、鑑賞支援を検討している。支援内容についてアドバイスが欲しい。
- 創造について……支援で関わっている人が、余暇活動としてアート活動できる場所を探している。
- 発表について……写真や絵画、音楽が趣味で、発表する機会があれば教えてほしい。
- 交流・連携について……障がい者の音楽活動をサポートする会社を設立した。神奈川県内の障がい者の音楽活動の状況を知りたい。
- 調査研究について……アート活動をしている福祉施設のフィールドワークを検討しており、調査先について相談したい。
- 権利保護について……ホテルで障がいのある人の作品展示をしたいので、作品を貸し出してくれる福祉施設を紹介してほしい。
- 人材育成について……福祉施設内で芸術文化活動に取り組みたい。講師を紹介してほしい。
- 情報発信について……文化施設等が行う障がい者のある人を対象としたイベントなどの広報に協力してほしい。

相談内容から見えてきたこと

◆福祉施設や文化施設から、自分たちで企画している障がいのある人に向けた芸術文化活動への協力を求める相談が多くありました。文化施設や社会福祉協議会等が持つ講師登録の制度を紹介したり、企画にアドバイスをしたりといった対応を行い、企画が実現した例もありました。県内各地で、障がいのある人と芸術文化の接点をつくる取組みの機運が高まっていることを感じました。

◆相談をとおして、障がいのある人の芸術文化活動を支える活動をしている、芸術文化団体や企業と出会うことがありました。支援センターのことを知らなかったという声もあり、引き続き取組みを周知をすることで、支え手となりうる連携先を見つけていきたいと思います。また、支援センターが把握している情報の活用方法を検討したいと思います。

情報収集・発信／座談会

情報収集・発信

パンフレットを作成し、相談窓口など事業の周知を行いました。ウェブサイトでは、センター主催事業などの広報をしました。また、「神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターだより」として、県内外の障がい者の芸術文化活動に関する情報発信を8回行いました。(2025年2月28日時点)こちらのお知らせは、メーリングリストでもお届けしました。

パンフレット

ウェブサイト

講演・講座等の実績

- 川崎市「パラアート委託事業」審査員
- 川崎市「インクルーシブ音楽プロジェクト いろいろねいろ 2024」ワークショップ視察(2024年12月9日)
- 「うみのもりの玉手箱4」関連トークイベント「つくる・つたえる・つながるサミット」
  (主催:千葉県、南関東・甲信障害者アートサポートセンター(社会福祉法人みぬま福祉会)/2025年1月21日)
- 「つながる!ひろがる!パラアート・ミーティング」(主催:公益財団法人 川崎市文化財団/2025年3月19日)

座談会「文化施設のみなさんと考える障がいのあれこれ」

▶テーマ:さまざまな人がいっしょに楽しめる公演とは

◎ 日時:2025年2月19日(水) 14:00〜18:30　◎ 参加者:7名

◎ 会場:神奈川芸術劇場 ホール(横浜市中区山下町281) および 横浜市開港記念会館 4号室(横浜市中区本町1-6)

地域の文化拠点となる劇場やホール、美術館などの文化施設。障がいのある人を含むさまざまな人が訪れる場所として、どんなことがあったらよいのか、文化施設の職員のみなさんといっしょに考える座談会を行ないました。
今回は、KAAT神奈川芸術劇場の主催公演「花と龍」における、鑑賞サポートとリラックスパフォーマンスの要素を盛り込んだ回「やさしい鑑賞回」を鑑賞し、年齢や障がいの有無に関わらず、さまざまな人が一緒に楽しめる公演のあり方について、意見交換をしました。県内各地の文化施設のみなさんと、ふだんの対応のなかでの気づきや工夫などを情報共有し、誰もが芸術文化を楽しめるための環境づくりについて、考える時間となりました。

協力委員会

神奈川県内の多分野における関係者のネットワークづくりや、支援センターの運営方針について検討する場として、さまざまな分野の専門家による協力委員会を設置し、年２回のオンライン会議を開催しました。今回は、公募したワークショップ実施施設の状況を共有し、福祉施設における芸術文化活動の課題や、ワークショップ実施事業の方針について議論しました。

構成員	専門委員	相田泰宏（独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所　インクルーシブ教育システム推進センター　主任研究員） 中西享（公益財団法人 神奈川芸術文化財団 社会連携ポータル課　課長） 又村あおい（一般社団法人 全国手をつなぐ育成会連合会　常務理事兼事務局長） 和田剛（障害者スポーツ文化センター 横浜ラポール　文化事業課長）
	行政関係者	神奈川県障害福祉課、神奈川県共生推進本部室、神奈川県文化課、神奈川県特別支援教育課、神奈川県生涯学習課

第１回

日時：2024年6月13日(木)　15:00～17:00　開催形態：オンライン会議システムZoomを使用

協力委員の紹介／令和６年度ワークショップ実施事業 実施施設公募の状況について

初回は、協力委員のみなさんの活動についてご紹介いただきました。また、今年度のワークショップ実施事業における実施施設の公募の状況について共有しました。

第２回

日時：2025年1月17日(金) 15:00～17:00　開催形態：障害者スポーツ文化センター ラポール上大岡にて対面開催

今年度の事業進捗の報告／次年度の事業方針について

今年度の事業進捗の報告のあと、次年度の事業の方向性について意見交換をしました。相談がなかなか寄せられていない教育関係者への周知についてや、ワークショップ実施後の福祉施設における芸術文化活動の続け方について、それぞれの知見からご意見をいただきました。

相田泰宏（あいだ・やすひろ）

横浜市内の特別支援学校教員を経て、令和４年度より現職。障がい児のキャリア教育や就労支援、進路指導における連携のあり方などを研究している。地域に関わらず水準の高い特別支援教育を受けられる環境を整えるために、情報収集・発信をしている。

中西享（なかにし・すすむ）

一般財団法人地域創造、アーツカウンシル新潟で芸術分野の中間支援に関わり、令和6年度4月より現職。社会連携ポータル課では、社会と芸術をつなぎ、誰もが芸術文化に親しみ、楽しめる環境を創ることを目指して事業を展開。

又村あおい（またむら・あおい）

令和元年度まで平塚市役所にて福祉総務課に在籍。過去、障害福祉課在籍時は、障がい者福祉計画、障がい児支援全般などを担当。平成26年度に内閣府へ出向、障害者差別解消法の策定に関わり内閣府障害者差別解消法関係各種検討会委員も務める。令和2年度より現職。

和田剛（わだ・たけし）

2001年より社会福祉法人横浜市リハビリテーション事業団に入職。障害者スポーツ文化センター横浜ラポール文化事業担当を経て現職。障がいのある方の芸術発表の場でもある「横浜ラポール芸術市場」をはじめとした障がい者の余暇支援事業を展開。

つくる

ここでは、障がいのある人が芸術文化活動に触れる機会をつくる活動についてご紹介します。今年度は県内8か所の障害福祉サービス事業所にて、芸術家によるワークショップを計22回実施しました。昨年度も実施をした4施設に加え、今回新たに実施施設を公募で募り、4か所の施設にお伺いすることになりました。応募は34件と過去最多でした。いっしょに身体で表現したり、さまざまな素材にふれるものづくりをしたりするなかで、それぞれの好きなことを見つけて共有する、豊かな時間が生まれました。

ワークショップ実施

第2松風園 × 上村なおか

ダンス
DANCE

「そのままの身体と出会う」

- 期間：(1)2024年12月17日(火)　(2)12月18日(水)　(3)2025年2月25日(火)　● 時間：10:20〜11:20、13:30〜14:30
- 参加者：(1)13名　(2)14名　(3)16名　● 対象：主に知的障がいのある成人
- アーティスト：上村なおか(ダンサー・振付家)　● アシスタント：田中来夢、宮崎あかね
- 対象施設名：大和市障害福祉センター 第2松風園　● 運営法人名：社会福祉法人大和しらかし会
- 施設種別：障害福祉サービス事業所(生活介護)　● 住所：大和市西鶴間2-24-1
- URL：https://www.city.yamato.lg.jp/gyosei/soshik/57/shogaishafukushi/shogaifukushiservice/6186.html

第2松風園は、主に知的障がいのある人たちが過ごす生活介護事業所です。紙すきなどの製品づくりや散歩など、その人の過ごし方や得意なことに合わせた4つグループに分かれて活動をしています。コロナ禍で外出などの余暇活動が難しくなったことがきっかけで、絵画や音楽、おしゃれなどのクラブ活動に力を入れ始めました。さらに余暇活動を充実させたいということで応募があり、今回はダンサーの上村なおかさんと、身体で表現する時間を過ごしました。4つのグループからそれぞれ参加者が集まり、施設内にあるホールで午前と午後に分かれて参加しました。言葉でのコミュニケーションが難しい人も多く参加しましたが、手や視線の動きで、さまざまなやりとりが生まれていました。

各日の様子

1日目 12/17(火) 10:20〜11:20、13:30〜14:30 参加者 13名

いつもと違う人たちと過ごす時間に、少し戸惑いもあるようでしたが、上村さんたちが近づくと、視線を合わせたり手を差し出したりしていました。

2日目 12/18(水) 10:20〜11:20、13:30〜14:30 参加者 14名

お互いを知り合う時間が続きます。
会場にあるピアノを弾いたり、上村さんが流す音楽に反応したり、それぞれの楽しみも見つけていました。

3日目 2/25(火) 10:20〜11:20、13:30〜14:30 参加者 16名

職員のみなさんが用意した布やボールも使って、あちこちでダンスが生まれていました。

実施を振り返って

福祉施設職員からのコメント

施設の中だけで行う芸術文化活動は、どこか職員が利用者を導いていく雰囲気がありますが、少しずつ誘導的なかかわり方を外していけたら、という想いがありました。そのことは余暇支援活動限らず、職員と利用者の関わり全体を通して重要な考え方だと思っています。今回のワークショップでは、1回目から徐々に、利用者、職員ともに順応するようすがあり、3回目では自由な表現が生まれ出したと感じました。

坂井田美帆（さかいだ・みほ）

令和2年より現職。主に知的障害のある利用者の生活支援員として従事している。余暇の充実を目的とした、余暇支援プログラムの企画と催しを担当。自由に表現する体験を積み重ねてもらう活動の促進に努めている。

アーティストからのコメント

今回私たちは、それぞれの「今日のカラダ」をともに「楽しむ」を一緒に探しました。初めは丁寧にささやかに、回数を重ねるにつれて利用者さんの身体はさらに雄弁になり、それぞれの身体言語がありました。職員さんの積極性やアイデアにも助けられ、既知のことに捉われず全員で未知の「楽しむ」を探せたのがよかったと思います。「わからない」や「知らない」ことをいかにおもしろがれるか、やってみなくてはわからない、ということを再認識した場でもありました。

上村なおか（うえむら・なおか） https://www.kasaiuemura.com/

石川県金沢市生まれ。幼少よりバレエを始める。「ひとつの身体」の可能性を探るべく'95年より自作ソロダンスを開始。「身体の発見と冒険」をキーワードに様々な人々とのワークショップ・協働も行っている。

まとめ

最初の2回は、それぞれの居たい場所で、座ったり立ったり歩いたりしていた参加者のみなさんが、終わり際になると動き始め、音楽に合わせるように跳びはねたりしていました。それまでの時間で上村さんたちから受け取ったことが、身体から表れているようでした。3回目は少し期間があいたこともあり、その間に職員のみなさんでダンスの時間を設けていたため、楽しみ方が深まっていたように感じました。今回のワークショップが、ふだんの活動やかかわり方のヒントになったのならと思います。（川村美紗／支援センター）

ほうあん第二しおん × 北川結

ダンス
DANCE

「みんなでつくるダンスの時間」

- 期間：(1)2025年1月16日(木)　(2)2月20日(木)　(3)3月11日(火)　● 時間：10:50〜11:30、13:30〜14:20
- 参加者：(1)27名　(2)29名　(3)29名　● 対象：主に身体障がいや知的障がいのある成人
- アーティスト：北川結(ダンサー・振付家・イラストレーター)　● アシスタント：内海正考、中村理
- 対象施設名：ほうあん第二しおん　● 運営法人名：社会福祉法人宝安寺社会事業部
- 施設種別：障害福祉サービス事業所(生活介護)
- 住所：小田原市根府川383　● URL：https://www.houan1900.jp/facilities/2shion/

ほうあん第二しおんは小田原市の西寄りに位置し、眼下には海、周りにはみかん畑が段になって連なる、のどかな場所にある通所施設です。主に知的障がいのある人が過ごす1課と重度重複障がいのある人が過ごす2課の2つのグループに分かれ、アクセサリーづくりや音楽などのレクリエーションと、日々を豊かにする活動に取り組んでいます。コロナ禍を経て外からボランティア等を受け入れることが減ったこともあり、人とのかかわりやレクリエーションの幅を広げたいということで、応募がありました。音楽やダンスが好きな人も多いということで、今回はダンサーの北川結さんといっしょに、身体で表現する楽しみを見つける時間を過ごしました。施設内の共有ホールを会場に、午前は2課、午後は1課の人が中心に参加しました。

各日の様子

1日目 1/16(木) 10:50〜11:30、13:30〜14:20 参加者 27名

北川さんたちを、拍手や手招きをして大歓迎。
一人ひとりとあいさつを交わしたり、ボールを渡しあったり、出会う時間となりました。

2日目 2/20(木) 10:50〜11:30、13:30〜14:20 参加者 29名

参加者のみなさんからのリクエストで演歌やアイドルの曲で踊り、盛り上がった後は、ふわふわの和紙の感触とハンドベルの音色でクールダウンしました。

3日目 3/11(火) 10:50〜11:30、13:30〜14:20 参加者 29名

これまでよりも積極的に身体を動かす人もいて、リラックスした雰囲気でそれぞれのダンスを楽しんでいました。

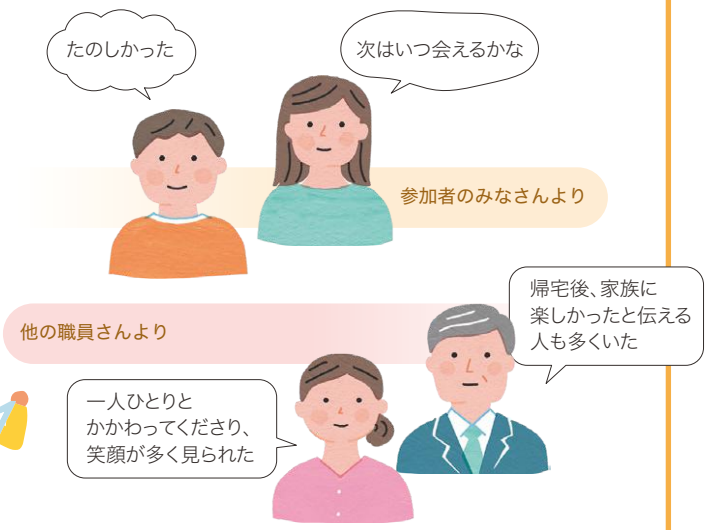
実施を振り返って

福祉施設職員からのコメント

ふだん行うことができない活動を通じて、参加者のみなさんのコミュニケーションを楽しむ力を知ることができました。参加がむずかしいのではないかと思われていた方が、興味を持って笑顔で参加するなど、まだまだみなさんの好きなことを引き出すことができるのだと思いました。3回目のワークショップでは、北川さんたちだけではなく、その場にいるみんなが一丸となってワークショップを完成させている雰囲気で取り組むことができました。

下田雪乃（しもだ・ゆきの）

介護福祉士。専門学校を卒業後、現職。現在6年目となる。
重度障害と重症心身障害のある方々の意思決定支援を日々学び、現場で生かし、利用者さんに「今日も来てよかった」と思っていただけるような活動を目指している。



アーティストからのコメント

はじめはお互いに少し緊張感がありましたが、回を重ねるごとにどんどんリラックスしていき、みんなで場を作っている感じがしました。音楽といっしょにわいわい踊ったことや、ハンドベルや高知県いの町産の和紙を使ってのやりとり、手と手の感触、三日間を通していろんな瞬間や感覚に出会えました。ワークショップ後の職員のみなさんとのお話は、参加者のみなさんのようすを共有できる大事な時間となりました。

北川結（きたがわ・ゆう） https://yukitagawa.com/

桜美林大学にてコンテンポラリーダンスを木佐貫邦子に師事。2008 年より白神ももこ主宰のモモンガ・コンプレックスにメンバーとして参加。さまざまな演出家、振付家の作品に出演するほか、ダンスのワークショップも行う。

まとめ

会場となったホールは、2階部分までの吹き抜けと大きな窓がある開放的な空間でした。この場所の雰囲気も手伝って、廊下を通りかかった人がそのまま参加したり、2階部分から見ている人がいたり、施設内にいる人が自由に関わることができていました。参加者のみなさんは、初日から北川さんたちと過ごす時間を楽しんでいることが伝わってきましたが、回を重ねるにつれて、いっしょにダンスの時間をつくる仲間になっていったように感じます。みんなで見つけた楽しみを、今後の活動にもつなげられるよう、いっしょに考えていきたいと思います。（川村美紗／支援センター）

ゆりあす × 中村マミコ

演劇
DRAMA

「一人ひとりの物語を見つめる」

- 期間：（1）2025年1月20日(月)　（2）2月17日(月)　（3）3月17日(月)　● 時間：14:00〜15:30
- 参加者：（1）10名　（2）11名　（3）10名　● 対象：主に精神障がいのある成人
- アーティスト：中村マミコ（OUTBACKアクターズスクール 校長）　● アシスタント：さっちゃん、りっちゃん
- 対象施設名：川崎市北部地域生活支援センター ゆりあす　● 運営法人名：社会福祉法人SKYかわさき
- 施設種別：地域活動支援センター　● 住所：川崎市麻生区百合丘2-8-2北部リハビリテーションセンター2階
- URL： https://www.sky1995.com/office/yurias.html

ゆりあすは、川崎市にある地域生活支援センターです。主に精神障がいのある人を対象に、安心して地域で生活するための相談支援や、調理や合唱、スポーツや勉強会などのプログラムの提供をとおして、社会参加につなげています。精神障がい当事者が、スタッフとして仲間に寄り添うピア活動も重視しています。ピアスタッフのなかで演劇に興味のある人がいたことと、精神障がいの理解を進めるための地域交流活動で演劇を活用したい、ということで応募がありました。精神障がいのある人とワークショップを重ね、本人の経験から演劇づくりをしているOUTBACKアクターズスクールの中村マミコさんと、アシスタントにはスクール生にもご一緒していただき、それぞれの頭の中にあるイメージや感情などを身体で表現することを体験しました。

各日の様子

1日目 1/20(月) 14:00〜15:30 参加者 10名

言葉でやりとりせずに誕生日順に並んでみるなど、身体で対話をしてみます。後半は、椅子などの物や駅などの場所を身体で表現し、みんなで見合いました。

2日目 2/17(月) 14:00〜15:30 参加者 11名

グループに分かれ、喜びや嫉妬などの感情を表現します。1人がイメージを指示し、他の人がポーズを作りました。

3日目 3/17(月) 14:00〜15:30 参加者 10名

「春の思い出」のお題をそれぞれが絵に描き、その絵をグループで再現します。2つの絵のシーンをつなげ、ちょっとした物語もできました。

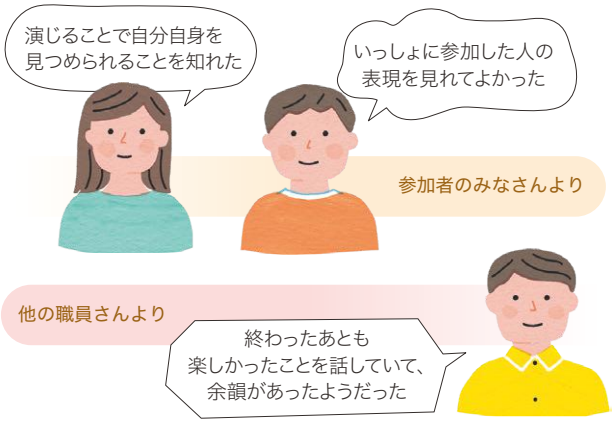
実施を振り返って

福祉施設職員からのコメント

なにが始まるかわからないワクワク感から、参加者のみなさんと対等な立ち場でいっしょに楽しめました。リカバリーを支える「自分の過去や価値観の一部を他者と共有する」作業。ふだんはそれが苦手な方が、演劇ワークショップの中では、自然に取り組めていたと思います。さらには、ふだん“ネガティヴさん”の超ポジティブな演出があったりと、新たな一面をたくさん発見。自ら苦しかった過去に向き合った勇敢な姿は誇らしくもあり、ゆりあすに集う多種多彩な個性がさらに愛おしくなる思いでした。

石井美樹（いしい・みき）

社会福祉士、精神保健福祉士。精神障がい者支援を専門とする社会福祉法人SKYかわさきに入職し、グループホーム、地域相談支援センターに従事した後、現職。精神障がい当事者が自分の人生を語りだす瞬間に支援の魅力を感じている。



アーティストからのコメント

ゆりあすの最大の特徴は、ピアスタッフがいること。そのことをうまく活かしてワークショップを進行したいと考えていました。実際ワークショップをやると、ピアスタッフたちがとても積極的に楽しみ、いい意味でスタッフという立場性を捨ててフラットに参加してくださったことが、ワークショップにとてもいい影響を与えていたと思います。参加者は、「演劇」に対して変な先入観を持たず、好奇心と素直な気持ちで飛び込んできてくださり、とても風通しの良い表現の場になりました。

中村マミコ（なかむら・まみこ） OUTBACKプロジェクト https://outback-jp.com/

2005年から世田谷パブリックシアターで教育普及事業を担当。'12年以降、横浜市内の福祉事業所で支援職として働きながら、メンタル不調を抱える人たちと演劇やアートプロジェクトを実施。'20年からOUTBACKプロジェクトとして、ワークショップ、公演の実績を重ねている。

まとめ

言葉を使わずに身体でコミュニケーションを楽しむことから始まり、物、感情、物語と少しずつ表現するテーマが変わってきました。どの回も、少しずつその人が内面に持っている気持ちや経験が表れてきたことが印象的でした。みんなで見る時間もあることで、どう見せるか、という自分を演出する視点も生まれていました。参加者からも職員のみなさんからも、定期的にやってみたいという声があがり、今後につながるサポートを考えていきたいと思います。（川村美紗／支援センター）

LEO × ドゥイ

美術
ART

「まざる、つくる、あそびの時間」

- 期間：2024年12月26日(木)　● 時間：13:30〜14:30
- 参加者：5名　● 対象：主に身体障がいと知的障がいを併せ持った子ども
- アーティスト：ドゥイ（造形ユニット）
- 対象施設名：多機能型事業所 LEO　● 運営法人名：NPO法人ハビリテーションケア
- 施設種別：障害児通所施設（児童発達支援センター、放課後等デイサービス）
- 住所：鎌倉市城廻54-1　● URL：https://www.habilitationcare.com/

LEOは身体障がいと知的障がいを併せ持った重度重複がいや医療的ケアが必要な子どもたちも過ごせる場として、2023年に開所したばかりの通所施設です。創作活動や運動、季節に合わせたイベントなどさまざまな活動に取り組んでいます。開所当初から、障がいの有無に関わらず地域のなかで人が交流する場でありたい、という思いがあり、ワークショップをとおして、そのヒントを得られたらと応募があり、まずは利用者とその家族を対象とした美術の取組みを行うことになりました。造形ユニットのドゥイのお二人にご一緒していただき、紙などの身近な素材を使って、さまざまな遊び方を見つけました。LEOの利用する子のきょうだいも混ざり、できあがった作品と笑い声とで、部屋がどんどんにぎやかになっていきました。

当日の様子

紙をちぎって紙ふぶきにしたり、帽子をつくったりして、
紙の変化を楽しみました。

アルミホイルやセロハンなど、
さまざまな素材が登場します。

部屋にはりめぐらせた
セロテープに素材を貼り付け、
部屋が飾られていきます。

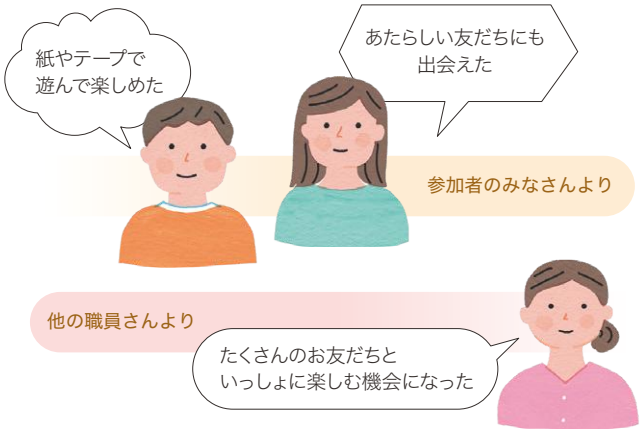
実施を振り返って

福祉施設職員からのコメント

子どもたちのふだん見ることのできない姿が見れて、とても嬉しかったです。みんなで楽しんでいるあいだに部屋の中がどんどん変化していき、気づくといつもの空間とは違うすてきな場所になっていました。紙ひとつとっても、質感によってひらひらさせたときの音、光など、楽しみ方がたくさんあると感じました。セロテープやアルミホイルなどの日常生活で使っているものも、こんな楽しみ方があること、色や光が美しいことを知れました。

渡部有美（わたなべ・あみ）

地域における医療的ケアが必要かつ重症度の高い子どもの居場所づくりの必要性を感じ、現代表とともにNPO法人ハビリテーションケアを立ち上げる。14才の重度重複障害児と、7才の2児の母でもある。



アーティストからのコメント

大きな窓から緑が見え、ふつうのお家のような空間で、今思い返すと、友達の家に行ってみんなと遊んできたようでした。利用者さんのきょうだいの参加もあり、年齢も障がいのあるなしも、幅広い状況でした。どこに意識を向けてやったらいいか、最初は少し悩みましたが、始まってしまえば全くの杞憂で、みんなが混ざり合っていることに不安はひとつも感じませんでした。それぞれに楽しみを見つけることも、お互いに影響し合うことも両方あったように思います。

ドゥイ http://duilab.com/

小野亜斗子

轟岳

小野亜斗子・轟岳による造形ユニット。横浜・石川町の「ドゥイの実験室」にてこども造形教室をひらく他、各地でワークショップを実施。参加者のひらめきを大切に、「クリエイティブな遊びの時間」を研究している。

まとめ

身体の状況や得意なことがさまざまな子どもたちが、いっしょに作り遊ぶ場となりました。同じ紙を手にしても、ちぎる、にぎる、折るなど、できあがる形は一人ひとり違います。だれかがちぎった紙で部屋を飾ったり、自分が作った帽子をだれかがかぶったり、生まれてきたものを介した豊かなやりとりがたくさん見られました。もともと古民家だった場所の雰囲気もあたたかく、LEOがさまざまな人が集まってともに過ごす場となっていくきっかけとなったのならと思います。（川村美紗／支援センター）

アグネス園×原良介

美術
ART

「みんなの色を重ねる」

- 期間：（1）2024年9月6日(金)　（2）9月9日(月)　（3）9月11日(水)　● 時間：10:15〜11:55
- 参加者：（1）11名　（2）15名　（3）15名　● 対象：発達支援の必要な未就学児
- アーティスト：原良介（画家）　● アシスタント：加藤祥子
- 対象施設名：児童発達支援センター アグネス園　● 運営法人名：社会福祉法人小百合会
- 施設種別：障害児通所支援事業所（児童発達支援）
- 住所：平塚市追分9-47　● URL：https://sayurikai.com/

児童発達支援センターアグネス園は、主に就学前の発達支援の必要な子どもが通う施設です。年長2クラスと年中・年少が混ざる4クラスに分かれて、生活に関することから、運動・感覚遊び・音楽などの活動に取り組んでいます。昨年度はダンスワークショップをとおして、身体を使った表現を楽しみました。今回は、絵や創作活動が好きな子どもの興味を引き出したいと、画家の原良介さんにご一緒していただきました。原さんが用意した枝が描かれた模造紙に、絵の具で葉っぱをつけていきます。1回あたりを2枠に分け、3日間で1クラス1回ずつ参加し、1クラス1本の木が完成しました。保護者のみなさんやきょうだいもいっしょに参加し、親子で協力して描く場面もありました。

各日の様子

1日目 9/6金 10:15～11:55 参加者 11名

筆や刷毛、スポンジなど描き心地を選べるように
道具を用意しましたが、手で直接描く子もいました。

2日目 9/9月 10:15～11:55 参加者 15名

一人ひとりに紙皿と絵の具を配り、色を混ぜます。
好みの色になるまで、
青と黄色の配分を試していました。

3日目 9/11水 10:15～11:55 参加者 15名

高い部分の枝には、ジャンプしたり、
大人に抱きかかえてもらったりして、全身を使って
葉っぱを描きました。

実施を振り返って

福祉施設職員からのコメント

大きな紙に思い思いに混ぜて作った色をのせていくこどもたちの表情はとても生き生きしていました。自分で作った色を自分で選んだ道具で、自分のタイミングで紙にのせていく過程は、「他」の影響も受けながら「己」と向き合い、心と対話しながら“表現”する素晴らしい活動であったと感じました。参加された保護者からは、親子で一緒に楽しみ、こどもの成長を感じられる貴重な体験ができたなど、喜びの声が多くありました。

入江憂貴子（いりえ・ゆきこ）

子どもと音楽に関わる仕事がしたいと思い、保育士資格を取得。音楽療法なども学び、2017年にアグネス園に入職。4年間直接支援にあたった。現在は、相談支援専門員として、利用児と保護者の相談支援にも携わっている。

アーティストからのコメント

机の上に描くのとは違って、壁に貼った大きな紙に描くダイナミックさを味わってもらうこと、色が混ざり合って新たな色が生まれる発見をしてもらえたら、と思い3日間の準備をしました。色を混ぜるのに夢中な子もいれば、すぐに紙に描き始める子もいて、それぞれの興味やペースの違いがありながらも、いっしょに楽しむ場となっていたように思います。全身で描く喜びを実感している子どもたちの姿はとても印象的で、みんなでつくり上げた作品は生きる力そのものでした。

原良介（はら・りょうすけ） https://ryosukehara.com

多摩美術大学美術学部絵画学科卒業、多摩美術大学大学院美術研究科修了。「人と自然と絵のあいだ」をテーマに、複数の時間や異なる空間などの概念的要素を取り込みながら、絵を描くということは次元の移動をおこなうことであると意識して制作している。

まとめ

絵の具が混ざってできる色の変化や、紙に色が付いていく感触を、身体いっぱいに感じてのびのびと楽しんでいる子どもたちのようすが印象的でした。各クラス1枚ずつ完成した作品は、ワークショップが終わった後みんなで鑑賞したり、クラスの活動で制作した動物やフルーツの絵を加えたり、職員のみなさんがさらに活動を発展させる工夫をしてくださっていました。すぐ近くにある美術館の方が見学に来て下さったこともあり、施設のなかにも地域のなかにも、芸術文化に触れる機会が広がっていくといいなと思っています。

（川村美紗／支援センター）

さらん × Art Lab Ova

美術
ART

「表現から出会う場」

- 期間：(1)2024年7月6日(土)　(2)8月20日(火)　(3)9月21日(土)　● 時間：10:30〜12:00
- 場所：(1)(3)桜本保育園(川崎市川崎区桜本1-9-6)　(2)川崎市ふれあい館(川崎市川崎区桜本1-5-6)
- 参加者：(1)6名　(2)9名　(3)15名　● 対象：主に知的障がいのある成人、児童
- アーティスト：Art Lab Ova(アーティストユニット)　● アシスタント：青山るりこ、福田麻衣子、竹内葉子、小原綾子、西村綾香、Catherine
- 対象施設名：地域相談支援センターさらん　● 運営法人名：社会福祉法人青丘社　● 施設種別：障害福祉サービス事業所(相談支援)
- 住所：川崎市川崎区桜本1-9-9　● URL：http://www.seikyu-sha.com/hotline/index.php?rby=%20&center=2careman#care2

地域相談支援センターさらんは、障がいのある方の生活に関するさまざまな相談を受けている場所です。韓国や朝鮮にルーツがある人が多く住む地域にあり、互いの違いを認め合う豊かさを大切にする土壌づくりに法人全体で取り組んでいます。障がいの有無、世代、民族などあらゆる違いに捉われず、いっしょに楽しむ場づくりのヒントを得たい、ということで応募があり、2年目の取組みとなります。今回も引き続き、横浜市で多文化につながる子どもが集まるアートスペースを開いているArt Lab Ovaのお二人といっしょに、自由に創作ができる場をつくりました。法人が運営する保育園や、多文化につながる子どもの居場所にもなっている公民館を会場に、多様な表現が混ざり合う場になりました。

各日の様子

1日目 7/6土 10:30〜12:00 参加者 6名

小学生やそのきょうだい、大人まで、さまざまな年代の参加者が集まりました。おしゃべりも楽しみながら、作品がつぎつぎと生まれます。

2日目 8/20火 10:30〜12:00 参加者 9名

ふれあい館を利用する子どもたちが参加。
段ボールに色を塗ったり、大きな家やハンマーを作ったり、遊びもどんどん発展していきました。

3日目 9/21土 10:30〜12:00 参加者 15名

初回の参加者が参加。保育園にいた子どもも加わります。
絵の具の塗り方を工夫したり、段ボールカッターに挑戦したり、興味を究めていました。

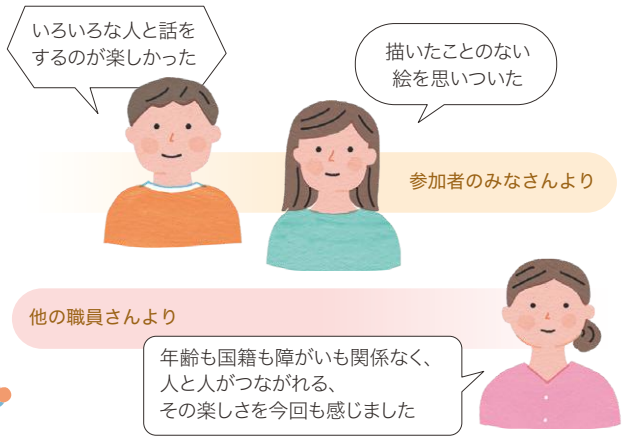
実施を振り返って

福祉施設職員からのコメント

全員が楽しみにして参加し、それぞれに2時間あまり、休憩もほどほどに絵を描き続けるという、充実した時間を過ごしました。裏方からいうと、それを実現するのは実は簡単ではありません。汚しても注意の必要がないように床と壁面を紙でカバー。絵の具、画材は参加者が選べるように配置・・・。環境設定が十分であれば、参加者は自主的になり、結果、指導や支援の量は少なくなるということを、今年も深く学びました。続けたいなあ。

武居光（たけい・こう）

川崎区桜本の「地域相談支援センターさらん」センター長。精神保健福祉士、相談支援専門員。1981年から障害児者とその家族の支援に主にケースワーカーとして関わっている。



アーティストからのコメント

今回は昨年からのリピーターの参加者も多く、この場の空気を知っている安心感からか、自分で新しい技法の用具を持ち込むなど、より能動的に活動に参加してくれました。アシスタントには、海外につながる高校生たちやふだん福祉施設などで働く人たちが参加するなど、それぞれの個性を現場で生かしてくれました。またさらんの職員のみなさんとの信頼も深まり、より連携がスムーズでした。総じて継続の重要性を感じられました。

Art Lab Ova（あーとらぼ・おーば） https://www.facebook.com/artlabova/

蔭山ヅル

スズキクリ

1996年に発足した蔭山ヅル、スズキクリによる、アーティスト・ランの非営利団体。制作経験の有無やしょうがいの有無、年齢、国籍に関わらず、多様な人々が交流をできるアートプロジェクトを展開する。

まとめ

昨年度つくった創作の場をさらんとして継続していきたいという思いから、もう一度Art Lab Ovaのお二人にご一緒していただき、同じ会場で自由に描いたり作ったりできるアトリエを開きました。昨年度も参加した人が来てくださり、さらに1日目の参加者は全員3日目にも参加しており、こういった場が求められていることが感じられました。参加者同士でおしゃべりを楽しんだり、お互いの絵を見合ったりしながら、交流を深めている姿が印象的でした。今後の場づくりについては、支援センターも相談に乗っていっしょに考えられたらと思います。（川村美紗／支援センター）

リエール×ドゥイ

美術
ART

「それぞれの表現がつながる」

- 期間：(1)2024年9月26日(木)　(2)10月3日(木)　(3)10月10日(木)　● 時間：10:30〜11:30
- 場所：地域交流ホームかわうそ（藤沢市獺郷1002-1(湘南ふくし村内)）
- 参加者：(1)8名　(2)8名　(3)7名　● 対象：主に知的障がいのある成人
- アーティスト：ドゥイ(造形ユニット)
- 対象施設名：発達支援センターリエール　● 運営法人名：社会福祉法人光友会　● 施設種別：障害福祉サービス事業所(生活介護)
- 住所：藤沢市獺郷1006(湘南ふくし村内)　● URL：https://www.lfa.jp/office/zaitaku/

発達支援センターリエールは、知的障がいを中心に発達障がいや自閉症を伴う方などが通う藤沢市にある生活介護事業所です。もともとは同じ敷地内にある湘南希望の郷ケアセンターで過ごしていましたが、障がい特性に合わせた支援をする施設として2022年に新たに開設されました。言葉でのやりとりが難しい方もいるなか、コミュニケーションの幅を広げられたらと、昨年度はダンスをとおして身体で表現する楽しさをみんなで見つけました。今回は造形ユニット・ドゥイのお二人と、氷や紙などのさまざまな素材に触れ、かたちや感触の変化を楽しむ時間を過ごしました。参加者それぞれが、夢中になる瞬間を見つけていたようでした。

各日の様子

1日目 9/26(木) 10:30〜11:30　参加者 8名

氷のかたまりに、金属の部品を置いて
跡がついたり、ネジを回して穴があいたりする
ようすを楽しんでいました。

2日目 10/3(木) 10:30〜11:30　参加者 8名

手触りや大きさがさまざまな紙が、つぎつぎと登場。
破ったり、身体に巻いたり、丸めたり、
紙の変化を味わいました。

3日目 10/10(木) 10:30〜11:30　参加者 7名

パイプやプラ段で作った枠を、
ちぎった紙やセロハンなどで飾り、
最後は光を当てて、影を鑑賞しました。

実施を振り返って

福祉施設職員からのコメント

昨年度ダンスの取組みをしたことで職員側もイメージが持て、この人も参加できるのではないか、と参加者の幅を広げて考えることができました。回数を重ねるごとに利用者のみなさんがものや人に積極的に関わり、活動の理解につながっていくようすも見られました。ふだんとは異なる活動や人との関わりなので、はじめは身構えていた部分がありましたが、徐々にほどけていく様子が見受けられました。できたことへのまわりの反応や場面の移り変わりが良い刺激になっていたと思います。

石井健太（いしい・けんた）

介護福祉士。社会福祉法人光友会の職員として17年従事する。2022年から自閉症、発達障害、知的障害の方の専門的な事業所を開所しのサービス管理責任者として日常の支援の評価や組み立てを他の職員とともに切磋琢磨している。

アーティストからのコメント

参加者のみなさんがどんな反応をするのか、最初は探り探り始めたのですが、マイペースながらもそれぞれが応えてくれて、だんだんと「いっしょに楽しく遊びましょうよ」という雰囲気になっていった気がしました。言葉や表情でなにかを伝えようとしてくれる方もいれば、紙を破ったり丸めたり、投げたりすることで、笑ったり怒ったり。言葉ではなくこんなことで成立する会話があるんだな、と実感できました。とにかく楽しかったです！

ドゥイ　http://duilab.com/
左：小野亜斗子　右：轟岳
プロフィールは ▶P.19参照

まとめ

さまざまな素材を通して、一人ひとりの興味を見つけるところから始まりましたが、氷に穴をあけたり、紙をちぎって並べたり丸めて投げたり、参加者それぞれに好きな行為を見つけて、存分に味わっているようすがありました。一人ひとりが作っていたものが空間を彩り、いつの間にか部屋全体が変化し、最後にはみんなで一つの作品を作ったような一体感がありました。つくることを通して、言葉に限らないコミュニケーションを体験する時間となったのではないかと思います。（川村美紗／支援センター）

ケアセンター × ドゥイ

美術
ART

「五感をつかって変化をたのしむ」

- 期間：(1)2024年9月26日(木)　(2)10月3日(木)　(3)10月10日(木)　● 時間：13:30〜14:30
- 参加者：(1)7名　(2)11名　(3)8名　● 対象：主に身体障がいと知的障がいを併せ持った成人
- アーティスト：ドゥイ(造形ユニット)
- 対象施設名：湘南希望の郷ケアセンター　● 運営法人名：社会福祉法人光友会
- 施設種別：障害福祉サービス事業所(生活介護)
- 住所：藤沢市獺郷1006(湘南ふくし村内)　● URL：https://www.lfa.jp/office/zaitaku/

湘南希望の郷ケアセンターは、身体障がいと知的障がいを併せ持った重度重複がいのある方が通う生活介護事業所です。みなさん車椅子を使用し、医療的ケアが必要な方も多くいます施設でもご家庭でも外出やイベントに参加しづらい状況があり、ワークショップをとおして芸術文化に触れる機会をつくりたいということで応募があり、今回が2年目の取組みです。昨年度のダンスに続き、今回は美術をとおして新たな経験を広げました。氷の冷たさや紙のやわらかさといった感触や、さまざまな素材を破ったり引っ張ったりしたときの音を味わったり、部屋が飾られる様子を眺めたり。五感を使って、さまざまな感覚を味わっていました。

各日の様子

1日目 9/26(木) 13:30〜14:30　参加者 7名

お昼後でまどろんでいた人も、氷の冷たさに目を見開いていました。氷の塊に金属が当たる時の音に耳をすます人も。

2日目 10/3(木) 13:30〜14:30　参加者 11名

ちぎった紙の音や宙に舞うようすに反応していました。紙は部屋中に飾られ、空間の変化も感じているようでした。

3日目 10/10(木) 13:30〜14:30　参加者 8名

紙をちぎって飾ったあと、最後にビニールでできた大きなトンネルが登場。扇風機からの風に乗って降ってくる、紙や風船を目で追っていました。

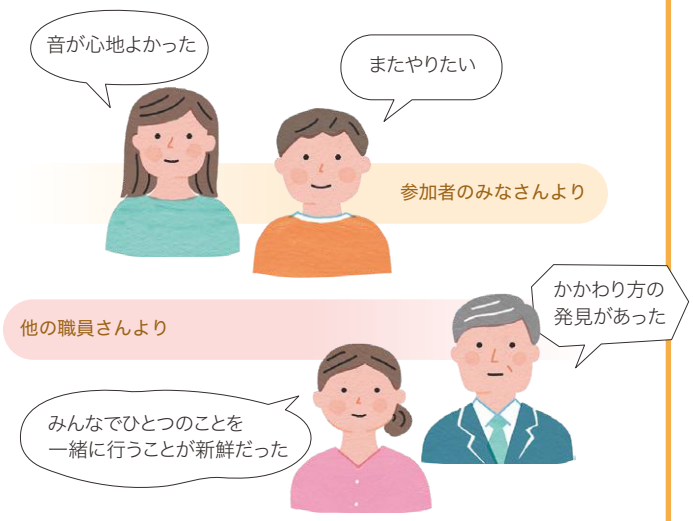
実施を振り返って

福祉施設職員からのコメント

利用者のみなさんが感じる「わかりやすい」「たのしい」や、「むずかしい」を知ることができました。また、ワークショップ終了後のようすから、利用者のみなさんが余韻を感じていることが伝わってきました。活動の内容や進め方、盛り上げ方など、日々の活動にも取り入れやすく職員にとっても勉強になりました。これからも利用者のみなさんのたくさんの「ツボ」を探していきたいです。

辻本亜希（つじもと・あき）

介護福祉士。社会福祉法人光友会の入所部門に20年以上勤務。2016年より現職。特に医療的ケアのある利用者の「経験すること・体験すること」を大切に、利用者も職員も楽しいと思える事業所づくりに努めている。



アーティストからのコメント

氷を触ったり溶かしたりした時に最初はあまり反応が見られなかった方も、氷を金物で叩いたら反応があり、音も意識しながら進めました。セロテープをピリピリと引き出す音でチラッと目線が変わるようすを見て、日常の音もどんなふうに聞こえているのだろうと考えていました。視覚や触覚なども含め、興味を持つ部分はそれぞれ違うとは思いますが、職員のみなさんもいっしょにわいわいとした楽しい雰囲気は伝わったのではと思います。3回を通して、みなさんと仲良くなれた気がしました。

ドゥイ http://duilab.com/

左：小野亜斗子　右：轟岳

プロフィールは ▶P.19参照

まとめ

氷や紙などの身近な素材も、じっくり触って眺めて、音を聞いてみると、意外なおもしろさが見つかりました。視覚、触覚、聴覚などと参加者それぞれに興味を持つ五感のポイントが違っていましたが、ドゥイのお二人のお二人や職員のみなさんのかかわりから、楽しむきっかけが生まれていました。利用者のみなさんの感じる力を探ったり、引き出したりすることは、ふだんの活動ともつながっていたという職員さんの声もありました。今後の活動につながるヒントがあったのなら、と思います。（川村美紗／支援センター）

支える

ここでは、障がいのある人の芸術文化活動を支援するコーディネーター育成に関する取組みをご紹介します。今回は「ともにいること、表現すること」をテーマに、ケアを担う人同士の対話や表現をとおしたともにいる場づくりや、障がいのある人と社会をつなぐことを見つめる取組みを続けてきたゲストのお話をきっかけに参加者と一緒に考える時間をつくりました。全3回のうち、1回はオンラインで、ほかは対面で各会場に集まっていただき開催しました。また、年度末には事業報告会も対面で行い、参加者同士の交流の機会にもなりました。

勉強会

報告会

第1回

話してみよう「ケアをめぐるあれこれ」

ゲスト：花崎攝（シアター・プラクティショナー）　宮下美穂（特定非営利活動法人アートフル・アクション）

● 開催日時：2024年9月20日(金) 16：00〜18：00　● 開催形態：対面開催　● 参加者数：12名

● 場所：横浜市港北区民文化センター ミズキーホール 音楽ルーム（横浜市港北区綱島東一丁目9番10号 新綱島スクエア4階）

ケアを身体で表現してみる

近年、社会におけるケアの役割が注目されているなか、改めてケアとは何かが問い直されています。この回では、演劇ワークショップを通してケアを考える取組みを続けている花崎攝さんと宮下美穂さんをお招きし、ケアを見つめる実践についてお話を伺いました。花崎さんの演劇ワークショップを体験する時間も設け、ケアと表現について考えを巡らせました。

まずはじめに、参加者同士が知り合う意味も含めて、演劇ワークショップを体験しました。２人１組になり、お互いに自己紹介を聞いたあとに相手になりきって自己紹介したり、鏡のように相手の動きを真似して動いたり、イメージすることや身体で表現することをやってみます。最後に「２人で、ケアの場面を表してください」と花崎さんからお題が出されました。相手には具体的なイメージは相談せず、身体の向きや位置などだけを伝えます。寄り添うように隣に座る、背中をさする、手をつなぐなど、それぞれが思い浮かべるケアの場面が現れます。ひと言に「ケア」と言っても、その言葉から受けるニュアンスが人によってかなり違うことを実感しました。

自分の気づきを拡張することがケアの一歩

花崎さんは、一般市民との介護や老いをテーマにした演劇づくりや、演劇をとおして障がいのある人といっしょに地域社会に働きかける活動に関わるなかで、ケアについて考えてきました。「私自身は、障がいのある人をケアする、支援すると思ったことはなく、いっしょに表現することが楽しくて関わっている」と花崎さんは話します。

そんな花崎さんに宮下さんが声をかけて、2023年に実施したのが「演劇を通して“ケア”を考える連続ワークショップ」です。宮下さんが所属するアートフル・アクションは、東京都の多摩地域で、芸術文化をとおして市民と一緒にともに考える場や関係をつくることに取り組んでいます。活動のなかで訪れた児童養護施設で「ケアする人のケアがもっとあってもよいのではないか」と感じたことが連続ワークショップのきっかけになりました。「子どもと関わるあなたのモヤモヤ」をテーマに参加者を募り、ケアの場面で抱えるそれぞれのモヤモヤを、言葉や音楽、冒頭で行ったワークショップのように身体で表すことでほぐす時間となりました。自分のなかにあるモヤモヤを身体や音を使って表わし、モヤモヤを構成する関係性を他の参加者と協働して再現することで、モヤモヤをつくっている要素を見つけたりすること、「自分自身の気づきを拡張することがケアになるのでは」と宮下さんは感じたそうです。

ケアをする場面では、相手をどうケアするかにフォーカスがあたりがちですが、ケアを通して自分がどう感じたのか、関わっていくのか、「自分」に向き合う行為でもあることに気づくお話でした。

花崎攝（はなさき・せつ）

ロンドン大学ゴールドスミス校芸術学修士。演劇を通していろいろな人が出会い、社会や自分のことについて、いつもとは違った仕方で、共に考えるようなプロジェクトを多数行っている。主な仕事に、横浜・寿町の精神科デイケアにつながる人々との「ことぶきてがみプロジェクト」など。

宮下美穂（みやした・みほ）

2011年から小金井アートフル・アクション！の事業運営に携わる。事業の多くは、スタッフとして市民、行政担当者、近隣大学の学生などの多様な形の参加によって成り立っている。多様な表現活動が折り重なり、洗練されて行く可能性を日々感じている。

第2回

体験してみよう「音楽から生まれる、ともにいる場」

ゲスト：西井夕紀子（作曲家）

● 開催日時：2024年10月11日(金) 16：00〜18：00　● 開催形態：対面開催　● 参加者数：14名
● 場所：海老名市文化会館 サロン（海老名市めぐみ町6-1）

いっしょに音楽をつくる おもしろさを体験する

いっしょに楽器を奏で、みんなの言葉をつむいで歌をつくる時間からは、お互いのことを知り合う豊かなかかわりが生まれてきます。この回では、福祉施設や病院などで障がいのある人と音楽を通した出会いを重ねてきた作曲家の西井夕紀子さんを招きし、これまでの実践から感じた表現とケアについてお話を伺いました。お話の合間では、参加者のみなさんも音楽ワークショップを体験しました。

子どもの頃に演劇に触れ、舞台の音楽に関わりたい、子どもたちに音楽を届けたいという気持ちを持ち続けていたという西井さん。子ども向けワークショップをする機会が増えるなかで、障がいのある子どもたちに出会い、福祉分野にも活動が広がっていきました。これまで訪れた福祉施設でのワークショップのようすを、そこで生まれた歌とともに紹介しました。歌づくりではふだんの生活のなかでなじみのある言葉や、その場で出た言葉から歌詞をつくっている、というお話から「ちょっとみなさんで作ってみましょう」と歌づくりが始まりました。「いまどんな気持ちですか」という西井さんの質問に「はやくビール飲みたい」「(会場である)海老名はなんで海老なんだろう」と答える参加者の言葉や、メロディのアイディアが組み合わさり、あっという間に一曲できました。「自分が発した言葉が、他の人が介入することで、素敵な歌に変わっていくことがおもしろかった」という感想もあり、人といっしょに音楽をつくるおもしろさを体験する時間になりました。

音をとおして、ただ出会う

後半では、西井さんが用意した楽器を使って、音と親しむ時間になりました。カスタネットなどの馴染みのある楽器から、初めて見る楽器、ほうきや洗濯板などの日用品も並び、どうやって音を出すのかの試行錯誤を楽しむ参加者の姿もありました。全員で音を出して演奏したり、二人一組で会話をするように交互に音を出してみたり、言葉から離れて音の世界に没頭します。参加者からは、「音で会話した時に、音からその人らしさを感じ、相手とつながることができた感覚があった」という感想がありました。「言葉ではなく、音の方が伝わることがありますね。一方で、『こういう音が音楽である』とか『音楽が苦手』といったその人の経験が反映されると、『うまくできない』と楽器との隔たりが出来てしまいます。どの音もそれでいい、とほぐしていくことも大切です」と西井さんは話します。

「今回は『ケア』というお題をいただきましたが、私自身はなにかを与えたり、この人をこういう状態にしよう、という意図を持ったりせずに、音楽をとおしてただ出会う、ということを目指しています」と西井さんの言葉どおり、そこにいる人から生まれてくる音や言葉をともに味わう場となっていたことが印象的でした。その人の立場や背景に捉われずに、ただ出会うことから広がる表現とコミュニケーションの豊かさを体験した時間が、日々の人とのかかわりのヒントになっていたら嬉しいです。

西井夕紀子（にしい・ゆきこ）

舞台、映像への楽曲提供を行うかたわら、人が音楽を奏ではじめる瞬間・作りはじめる瞬間に魅力を感じ、学校、病院、文化施設、福祉施設でセッションや曲作りを実施。東京芸術大学音楽学部音楽環境創造学科卒業、同大学院修了

第3回

考えてみよう「障がいのある人とともにいること」

ゲスト：田中みわ子（東日本国際大学 健康福祉学部 教授）

- 開催日時：2024年12月2日(月) 11：00～ 12月16日(月) 11：00
- 開催形態：オンラインでの動画公開　● 申込み者数：61名

障害学は当事者だけにしか担えないのか

障がいのある人が中心となって「障害とは何か」を社会に投げかけてきた障害学では、障がいのある人をそばで支える人の立場についても議論になってきました。この回では、障害学の観点から障がいのある人の表現を研究分野としている田中さんをお招きし、障がいのある人とともにいる「私」のことをいっしょに考える時間としました。

障害学は、障がいの社会モデルの考え方を核とし、障がい当事者による運動、とりわけ障がい者の権利に関する運動の分脈から生まれた学問です。当事者性を重視しつつ、障がいのないいわゆる健常者も、障がいのある人が生きづらい社会の状況に対してどう介入し、変えていくかといったことにも問いや実践が重ねられてきました。田中さんは、障がいのある人とともにいることを考えるときに、参照する言葉があると言います。それは、あるシンポジウムのなかで「障害学は障がい者自身しか担えないのか」という議論があった時に、一人の障がいのある研究者が発した「障がい者だけで船は漕げない。いっしょに漕ぐ仲間が必要」という言葉でした。航海をともにする仲間としてあること、そして表現の場おいてともにいるということを考えるにあたっても、この言葉に始まり、この言葉に終わっていくと田中さんは話します。

ともにいることで表現が生まれる

後半は、田中さんが研究していた「クレアム」というベルギーの障害者施設でのアート活動の事例から、表現の場における関わりについてお話いただきました。

クレアムでのアート活動では、日常生活の支援者と、自分自身もアーティストである「アニマトゥール」がワークショップを担当します。アニマトゥールは表現を引き出し、社会に表現を届けるという役割を担っている点が、支援者とは違う点です。絵画やダンス、音楽や演劇などの活動で表現を引き出すときに重要視されていることが即興性です。アニマトゥールは、障がいのある人が自分の表現を生み出すことを待ちます。表現は本人から生まれてきたものですが、いっしょにいる支援者やアニマトゥールなど、誰かが立ち会っていることによって表現が生まれ、それを見て受け取る人がいるという表現のあり方が、クレアムでは意識的に作られています。この、能動と受動があいまいな「中動態」の関わりが、障がいのある人との表現活動の中では鍵になっていると、田中さんは考えます。

また、アニマトゥールが表現を社会に届ける役割を担うときには、作品の解釈や批評、作者の代弁が必要なのではなく、自分の関わり方や、立ち会った表現が生まれたプロセスを言葉にする「少しだけ通訳者」といった姿勢なのだと言います。ここでも、中動態的なともにいるあり方が分かります。

これまでのお話から、アニマトゥールの個と個の関係を大切にする関わりから、表現をとおしたともにいる関係が生まれていることが感じ取れます。「専門家と当事者だけの線の関わりだけでは、ポキッと折れてしまうような危うさがあるように思います。あそびやゆるさがないと関係性は開かない。」という田中さん。まずは「私」と「あなた」の関係があるということに立ち返って、障がいのある人とともにいることから、表現の場においてもいっしょに船/舟を漕ぐことができるのだと思いました。

田中みわ子（たなか・みわこ）

東京家政大学・東京家政大学短期大学部期限付助手、東京大学先端科学技術研究センター特任研究員、筑波大学外国語センター特任研究員を経て、2014年4月より現所属。障害学の立場から、障害のある人の表現について、身体文化研究を試みている。

報告会　地域とともに考える障がい福祉と芸術文化

大和市でのダンスの取組み・・・・坂井田美帆（大和市障害福祉センター 第２松風園 生活支援員）
上村 なおか（ダンサー・振付家）
小田原市でのダンスの取組み・・吉澤宏次（ほうあん第二しおん 所長）
北川結（ダンサー・振付家・イラストレーター）
川崎市での演劇の取組み・・・・・・石井美樹（北部地域生活支援センターゆりあす 主任・相談支援専門員）
なぎー（北部地域生活支援センターゆりあす ピアスタッフ）
中村マミコ（OUTBACKアクターズスクール 校長）

● 日時：2025年3月12日(水) 16：00～18：00　● 場所：神奈川県民ホール 6F大会議室（神奈川県横浜市中区山下町3-1）　● 参加者：22名

この報告会では、今年度の支援センターの事業について報告するとともに、ワークショップを実施した施設の職員のみなさんとアーティストといっしょに、取組みを振り返りました。会の後半では、神奈川県が実施する障がい者の芸術文化活動に関する事業紹介や、参加者同士が情報交換をする時間も設けました。

最初に支援センターから今年度の事業について報告したあと、今年度初めてワークショップ実施を行なった３施設の取組み紹介をしました。それぞれ実施施設の公募から、実施につながった施設です。職員のみなさんと、ご一緒していただいたアーティストに、ワークショップ通して感じたことを、改めてうかがいました。
※各施設のワークショップの詳細は、P.12～17をご覧ください。

コロナ禍で外出の機会が減り、昨年度から余暇活動に力を入れ始めたという第２松風園の坂井田美帆さんは、「職員だけだと活動のアイデアに限りがある。外部から人を招くことで内容が開いていったら」とワークショップに期待していたことを話しました。事前に施設を訪れてふだんのようすも知ったダンサーの上村なおかさんは、「余暇活動のなかで楽しむ工夫をされているなか、身体を通してだったら何ができるか。人それぞれの身体の向き合い方を考えてみよう」とワークショップの内容を考えていたと話します。ほとんど言葉を使わず、とことん身体の向き合い方を探る時間を通して、「職員の利用者さんに対する向き合い方や、視点の持ち方に変化があったことが大きかった」と坂井田さんは話します。他の職員さんからは「利用者さんの楽しみをもっと広げたい」「その人らしさを表現する時間の大切さに気づいた」という声があったそうです。

同じくダンスの取組みを行ったほうあん第二しおんの吉澤宏次さんは、「ダンスパフォーマンス大会をしていたこともあり、日々の活動に取り入れたい」と新しいダンスとの出会いに期待していたと話します。実際にダンサーの北川結さんたちに出会うと、「見たこともないダンスに、職員も参加者のみなさんも初めは驚いていたが、だんだん楽しみに変わっていた」と振り返ります。北川さんは実施にあたって「吹き抜けを活かして2階で踊ってみるなど、日常の景色を変える工夫もした。動きたくない、または身体の状況から自由に動くことが難しい人へのアプローチとして、三味線が弾けるダンサーを連れて、音楽的なアプローチもした」と、楽しみ方の幅を広げる試みもしていました。回を重ねるごとに、北川さんたちも参加者のみなさんもリラックスしていき、みんなで一緒に場をつくっている空気も生まれていきました。吉澤さん「ふだんは動画を流し、振付けを真似して踊っていたが、もっと内面から湧き出てくるものを職員がキャッチしていっしょに踊るという大切さに気づいた」と、今後の活動へのヒントがあったと話しました。

坂井田美帆
（さかいだ・みほ）
→P.13参照

上村なおか
（うえむら・なおか）
→P.13参照

北川結
（きたがわ・ゆう）
→P.15参照

石井美樹
（いしい・みき）
→P.17参照

中村マミコ
（なかむら・まみこ）
→P.17参照

ゆりあすからは、職員の石井美樹さんといっしょに、精神障がい当事者でありスタッフとしても働くピアスタッフのなぎーさんにも登壇していただきました。なぎーさんが以前OUTBACKアクターズスクール（以下OUTBACK）に参加していたこともあり、施設内で演劇に対する親しみが高まっていました。なぎーさんは「人の心は分からない。ふだんはその分からなさに耐えられないが、演劇だと「どう思ってる？」と聞ける。それが演劇の良さ」と話します。OUTBACKの校長である中村マミコさんは、「ゆりあすがピア活動を重視している場と分かっていたので、OUTBACKでやっているような演劇づくりができるのではと思った。当事者同士が語りあったり、いっしょに活動することに力がある」と、当事者でもあるOUTBACKのメンバーをアシスタントに迎えて、ワークショップを行ないました。石井さんは「ふだんは自分の経験を話すことに抵抗がある人が、怒りや悲しみといったネガティブな感情も表現をしていて驚いた。リラックスした場で表現できたことは大きな一歩」と振り返りました。ゆりあすでは、演劇を日々の活動プログラムのひとつとすることに向けて動いていることもあり「今回の取組みをどのように活用できるか、いっしょに考えていきたい」と中村さんは話します。

どの施設も、アーティストがかかわることで参加者や職員に変化があったこと、そしてふだんの活動へのヒントがあったことが話されたことが印象的でした。

後半は、テーブルごとに今日の感想やご自身の活動について共有する時間としました。終了後もみなさんなかなか席を立たず、話が尽きないようすでした。今後も地域や分野をまたいでさまざまな視点を交換しながら、障がいのある人と芸術文化がつながるよりよいあり方を、みなさんと考えていきたいと思います。

吉澤宏次
（よしざわ・ひろつぐ）

神奈川県職員の福祉職として34年間、福祉事業所や県庁で福祉業務に携わった後、重心施設を経て現職のほうあん第二しおんの所長を務める。さまざまな現場で、障がいのある人の余暇活動支援をライフワークとして取り組んできた。

なぎー

精神障がい当事者として、ゆりあすにてピアスタッフとして働く。OUTBACKアクターズスクール1期生として、2021年の第1回公演に出演した経験を持つ。演劇をやることで自分の殻から飛び出て、人とつながる瞬間を経験してみたいと考えている。

おわりに

障がいと身体をめぐる旅に最後までお付き合いいただき、ありがとうございます。
私たちが出会ったさまざまな身体、言葉、風景…。みなさんに届いたでしょうか。
この旅の記録が、みなさんの身近にある身体、言葉、風景を、これまでとは違う視点で見つめるきっかけとなったのなら嬉しいです。

今年度は、各事業のなかで一つひとつのことを深めていくような時間が生まれていました。相談対応では、福祉施設や文化施設、企業などで、これまで取り組んでいた障がいのある人と芸術文化をつなげる活動を、さらに一歩進めていくための相談が多くありました。勉強会では、「ともにいること」をテーマに自分自身のかかわり方や、その場の居方に目を向ける時間を、参加した人同士で分かち合いました。ワークショップでは、表現することをとおして、一人ひとりと出会い直すような時間を重ねました。身体で向き合うことで通じ合う瞬間や、紙や絵の具などのそれぞれの楽しみ方、演じることで表現できた新たな自分。表現から生まれるその人らしさを、その場にいるみんなで見つけ、共有しました。

これからも、だれもが芸術文化に触れられる場のあり方を探りながら、さまざまな表現が交差する風景を見つけに、旅を続けていきたいと思います。

障害と身体をめぐる旅 2024

編集	田中真実、川村美紗	写真	金子愛帆（P.12～15、P.20～27）
デザイン	水色デザイン	イラスト	熊本奈津子
印刷	共進印刷	テキスト	川村美紗

発行　神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター
〒220-0004 神奈川県横浜市西区北幸1-11-15 横浜ＳＴビル地下１階
（ 認定NPO法人 ＳＴスポット横浜 地域連携事業部内 ）

発行日　2025年3月31日

本事業についての問い合わせ ： 神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター

〒220-0004 神奈川県横浜市西区北幸1-11-15　横浜ＳＴビル地下１階
（ 認定NPO法人 ＳＴスポット横浜 地域連携事業部内 ）
TEL ： 045-325-0410　FAX ： 045-325-0414　MAIL ： info@k-welfare.org
https:// k-welfare.org　神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター
https://www.stspot.jp　認定NPO法人 ＳＴスポット横浜

神奈川県
障がい者
芸術文化活動
支援センター

STSpot Yokohama

神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター

令和6年度